

川崎病児及び両親の咽頭細菌叢について

東京女子医大第二病院小児科 草 川 三 治
浅 井 利 夫

〔研究目的〕

川崎病の原因は、今日までリケチア説、溶連菌説など数多くの学説が出されたが、いずれも追試成績は否定的であり、確立されたものはない。一方、臨床症状や疫学的な知見では、なんらかの微生物が本症の発病に関与

していることが推定される成績が多数ある。今回、注目した咽頭細菌叢については、これまでに全国的にアンケート調査がなされたことがある。しかし、アンケート調査では各施設で方法など異なり、その成績の評価はむづかしい。そこで、今回、改めて注意深く検討してみた。

表 1 検出菌の頻度

検出菌	対 象	患 児 32例	母 親 31例	父 親 30例	計 93例
	対 象 数				
常在菌叢		10例(31%)	12例	13例(43%)	35例
H. Parainfluenza		6例(19%)	6例	5例(16%)	17例
Sta. Aureus		5例(16%)	3例	6例(20%)	14例
Haemophilus 属		3例(9%)	7例	2例(7%)	12例
H. Influenza		5例(16%)	2例	2例(7%)	9例
β -Streptococcus		1例(3%)	3例	1例(3%)	5例
Candida		3例(9%)			3例
H. Parahemolitus		1例(3%)	2例(7%)	2例(7%)	5例
E. Coli		2例(6%)			2例
Sta. Epidermidis				1例(3%)	1例
Pseudomonas aeruginosa		1例(3%)			1例
H. Aphlophilus		1例(3%)			1例
Acinetobacter				1例(3%)	1例

表 2 患児の病週別検出菌

対象数32例

検出菌	病 週	第 1 病週	第 2 病週	第 3 病週
	対 象 数			
常在菌叢		7例 (22%)	2例 (6%)	1例 (3%)
H. Parainfluenza		3例 (9%)	1例 (3%)	2例 (6%)
Sta. Aureus		4例 (13%)	1例 (3%)	
Haemophilus 属		2例 (6%)	1例 (3%)	
H. Influenza		4例 (13%)	1例 (3%)	
Streptococcus				1例 (3%)
Candida		1例 (3%)	1例 (3%)	1例 (3%)
E. Coli		2例 (6%)		
H. Aphlophilus		1例 (3%)		
Pseudomonas aeruginosa		1例 (3%)		
H. Parahemolitus				1例 (3%)

〔研究方法及び対象〕

今回の咽頭細菌叢の検討にあたり、本症患児の多くが来院時、抗生剤を投与されていることが大部分であるので、患児の咽頭細菌叢のみを検討してもその意味づけはむつかしい。そこで、本研究では、患児と同時に両親の咽頭細菌叢を検討した。方法は本症患児入院時に、両親

も含め綿棒を用い、咽頭培養を行った。その後直ちに血液寒天培地、トリガルスキー培地、チョコレート寒天培地に塗布し、24時間培養後固定した。同時に、入院時までの抗生剤の使用状況を調査した。

対象は、4カ月から7才までの32例で、性別は、男児16例、女児16例であった。検査病日は、第1病週が21例

表 3 母親の病週別検出菌

対象31例

検出菌	病 週	第1病週	第2病週	第3病週
常在菌叢		10例 (32%)	1例 (3%)	1例 (3%)
H. Parainfluenza		2例 (6%)	2例 (6%)	2例 (6%)
Sta. Aureus		2例 (6%)		1例 (3%)
Heamophilus 属		5例 (16%)	1例 (3%)	1例 (3%)
H. Influenza			2例 (6%)	
β -Streptococcus		2例 (6%)	1例 (3%)	
H. Parahemolitus		1例 (3%)		1例 (3%)

表 4 父親の病週別検出菌

対象数30例

検出菌	病 週	第病1週	第病2週	第病3週
常在菌叢		7例 (23%)	4例 (13%)	2例 (7%)
H. Parainfluenza		3例 (10%)	1例 (3%)	1例 (3%)
Sta. Aureus		4例 (13%)		2例 (7%)
Heamophilus 属		2例 (7%)		
H. Influenza		2例 (7%)		
β -Streptococcus		1例 (3%)		
Sta. Epidermidis		1例 (3%)		
Acinetobacter		1例 (3%)		
H. Parahemolitus		1例 (3%)		1例 (3%)

表 5 検出菌の一致例

関 係	検 出 菌	計
患 児 - 母 親	H. Parainfluenza 2例 H. Influenza 1例 Heamophilus 属 1例 常在菌叢 1例	5例
患 児 - 父 親	常在菌叢 1例 H. Parainfluenza 1例	2例
患児-母親-父親	常在菌叢 4例 H. Parainfluenza 1例 H. Parahemolitus 1例 Heamophilus 属 1例	7例
母 親 - 父 親	常在菌叢 4例 β -Streptococcus 1例 H. Influenza 1例 Sta. Aureus 1例	7例
計		21例

(66%)、第2病週が6例(19%)、第3病週が5例(15%)であった。

検討した内容は、まず始めに患児、母親、父親別に検出菌の頻度をみ、次に病週別に検出菌の頻度、3者の検出菌の一致状態の3つについて検討した。

〔結果〕

川崎病児とその両親、32例の咽頭細菌叢を検討した結果、患児と両親の検出菌頻度は表1に示したように、常在菌が最も多く、特異的な菌は検出し得なかった。

次に、病週別に検討してみると、表2、表3、表4に示したように、一定の傾向はなかった。

最後に、患児および両親の3者の検出菌が一致した例を検討してみると、表5に示したように、32例中21例、

65.6%が一致した菌が検出され、菌としてはヘモフィルス属が最も多かった。

以上の結果より、今回の対象では、病原性と思われる菌は見い出されなかったが、本症の発病に、細菌が関与する可能性を否定するものではなく、今後も続けて検討する必要がある。

〔結論〕

1) 川崎病児および両親の32例について咽頭培養を行い、咽頭細菌叢を検討した。

2) 検出菌の頻度、病週別頻度、一致例の検討などを行ったが、特異的な成績は得られなかった。

3) 今後、さらに症例数をまして検討する必要がある。

川崎病罹患学童の心臓後遺症を発見するためのシステム作りに関する研究

東京女子医大第2病院小児科 草 川 三 治
浅 井 利 夫

〔研究目的〕

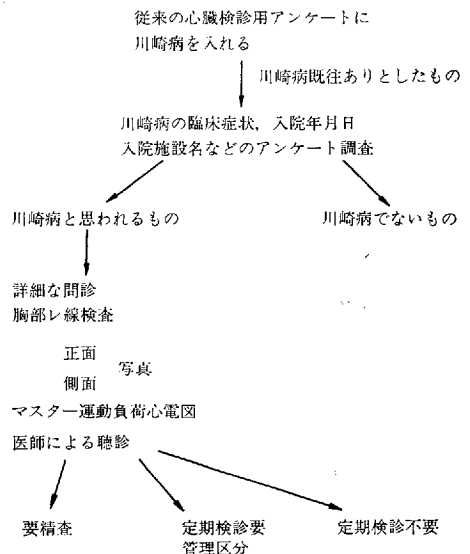
川崎病は心臓障害、特に冠動脈後遺症が注目され、実際に臨床ではこの冠動脈後遺症を残すか、残さないかが一番大きな問題である。しかし、この冠動脈後遺症は1974年に初めて報告されたもので、1974年以前に本症に罹患した児は冠動脈後遺症についてはまったく聞かされていない上、十分な検査もうけていないものが多いことが予想される。これらの児の中には、年令的には小中学校に入学し、冠動脈後遺症などを残したまま、それを知らずに普通の学校生活を送っている児がいる。そこでこれらの川崎病罹患の学童を検診し、心臓後遺症を発見することは非常に意味があることと思われる。今回は、川崎病罹患学童の心臓後遺症発見のためのシステム作りを試みた。

〔方法〕

川崎病罹患学童の心臓後遺症を発見するためのシステムを作ることに当り、2つの点を考慮した。1つは、現在行われている学童の心臓検診のシステムに従って、同時に無理なくできるようにした。第2には、これまでの川崎病心臓障害に関する知見のうち、最小必要限度、ど

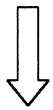
この場所でもできる検査方法などを選んだ。

表1 川崎病後遺症児発見のための検診方法





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔研究目的〕

川崎病の原因は、今日までリケチア説、溶連菌説など数多くの学説が出されたが、いずれも追試成績は否定的であり、確立されたものはない。一方、臨床症状や疫学的な知見では、なんらかの微生物が本症の発病に関与していることが推定される成績が多数ある。今回、注目した咽頭細菌叢については、これまでに全国的にアンケート調査がなされたことがある。しかし、アンケート調査では各施設で方法など異なり、その成績の評価はむつかしい。そこで、今回、改めて注意深く検討してみた。